

研究所だより

榎本 木綿

9月5～6日と両日に渡り開催いたしました労協連30周年記念イベントも無事終了しました。ご来場、お祝いのメッセージをお寄せいただいた方々始め、協同労働運動と労協連30年の歩みに関わりや思いをお寄せくださった全ての皆さまに御礼を申し上げます。

初日の内橋克人さんによる基調講演では市場原理主義、新自由主義から変化し始めたアメリカや世界の情勢、さらに人が人らしく生きる社会と労働のあり方について語られ、社会的有用労働を生み出す供給主体として長年奮闘してきた労協への今後のますますの期待が述べられ、第2部パネルディスカッションのパネラー、新潟労福協の江花和郎会長からは多元的経済社会をめざすなかで地域内の結び合いや暮らしの支えとともに、地域に必要な小さな仕事を地域住民自身がつくり、支え合う仕組みが重要で、そのためには地域の人間関係や経済のあり方そのものを変える必要があります、労協を含め担い手にはそのミッションへの共感や共有が求められると話されました。

また、2日目の30周年記念式典では功労者への表彰がなされ、協同総研からは杉本時哉元理事長、中川雄一郎元理事長、古谷直道前理事長、富沢賢治副理事長、堀越芳昭副理事長、石見尚顧問がその長年の功績と貢献に対して表彰され、併せ、故菅野正純元理事長への特別功労表彰がなされました。

記念レセプションには1,000名を越す方々

がお祝いに駆けつけてくださり、そのなかで「歴史はいつか真実にいたる」と題し、労協連30年の歩みを映像として放映しました。モノクロのフィルムに映る先輩たちは今も少しその面影を残しながらもやはり誰もが若く、目がきらきらと輝いているのが印象的でした。その映像を観ながら、先日、立教大学コミュニティデザイン学演習の佐野淳也准教授(21世紀社会デザインのNPO/NGO学)ゼミナールで行ったワーカーズコープ特別講義が思い返されました。

佐野先生とは浦河べてるの家が制作に携わった『降りてゆく生き方』という映画の上映会を立教大学で行った際にお目にかかり、立教大学にほど近いワーカーズコープの存在は前々から気になっていたとのことでしたので、ではぜひ何か一緒に始めてみましょうという呼び掛けがきっかけとなりました。

今回は立教大学セカンドステージ佐野ゼミナール受講生(50歳以上の生涯学習者)を対象に、労協の現在に至る軌跡と協同労働という新しい働き方について田中羊子・労協連専務に講義していただきました。中高年の失業対策事業から始まった労協が事業開始当初の病院清掃や物流現場でさまざまな困難や苦勞、喜びを組合員同士が共有していくなかで、いかに働く者の尊厳や主体性が育ち合っていたのか。また、日々の仕事の質の向上や利用者、地域を交えた懇談会などから育まれた信頼関係などについて

て話されました。

講義後の意見交換の場では、ゼミ生の方々からたくさんの感想や質問が出され、なかには1996年の東京高齢協設立総会に参加された方(!)や6月の協同総研総会記念フォーラムに参加された方々もおられ、たいへん驚かされました。

感想としては「協同労働のこうした働き方は多様な働き方につながる」、「生き方の幅が広がる」、「社会的公益性という点からとても期待される」といった声とともに、質疑の点では「組織構造が複雑でわかりづらい」、「零細企業などの家族経営との明確な組織運営形態のちがいは何か?」、「働く人たちはどのような層(性別、年代、年取など)か?」、「事業所閉鎖中の組合員の給与は?」など、具体的な組織構成や運営についての質問が出され、できるだけいねいに実態に沿って回答しました。1時間を予定していた講義は白熱した意見交換から2時間に及び、まずは現場を見ようと、いま視察を計画中です。

企業などの退職者を中心としたゼミ生の方々にとって「雇われない」働き方というものは馴染みのない考えであり、これは当然のことと思います。特に、企業戦士として第一線で活躍されていた方ほど、最初の理解がむずかしいようです。ですが、最後に一人の方から「ワーカーズコープの法制化がなされることで、さまざまな人たちが

働くことを通じて地域づくりに参加でき、それが豊かな社会の実現につながるのだと思う」と、法制化への期待が寄せられました。短い時間のなかで、NPOでもボランティアでも営利企業でもなく、市民自身による新しい公共の担い手としてワーカーズコープを捉えられたゼミ生の方々の感度に正直驚かされました。私たちは、シニア世代を「人生の完成期」と表しますが、学問の場に自ら身を置くその学びの姿勢に頭の下がる思いとともに、新しい協同の芽吹きを感じる嬉しいひとときでもありました。

この夏の衆議院選挙での民主党圧勝のなか、協同労働の協同組合法(仮)制定実現へ向け秒読みが始まっています。一方、労働の現場では過去最悪の失業率が出され、国や自治体と支援する現場との温度差のなか、現実が進むあまりの速さに正直苛立ちと戸惑いを感じます。戦後の失業や貧困、戦争へ反対し続けてきた労協の運動は30年の時を経て人びとの分断や競争が激しさを増すなかで、さらにその課題の深刻さを増しているようにも思われます。

さまざまな危機に瀕したこの時代に、協同労働の協同組合が果たすべき役割とその意義について、協同総研も研究活動を通じて考え、実践へ結ぶことが求められています。忍耐強く活動を積み重ねていくことが、次の10年、20年へとつながっていくのだと思います。